

公家町三条邸の家紋瓦

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



京都御苑内の発掘調査で出土した「結雁文」軒棧瓦

軒丸瓦の瓦当文様は、平安時代までは蓮華文がほとんどですが、鎌倉時代以降は巴文が大半を占めるようになり、これが現代まで続いています。これとは別に、安土桃山時代の大名は、自家の家紋を印した軒丸瓦や棟先瓦を自邸の屋根に用いることを始めました。これを家紋瓦と呼びます。家紋瓦は、武家屋敷などを中心に江戸時代を通じて流行しました。

1997年から2002年にかけて行なった京都御苑内の発掘調査では、様々な家紋瓦が出土しています。京都御苑は、江戸時代に御所の周囲に広がっていた公家町の跡地で

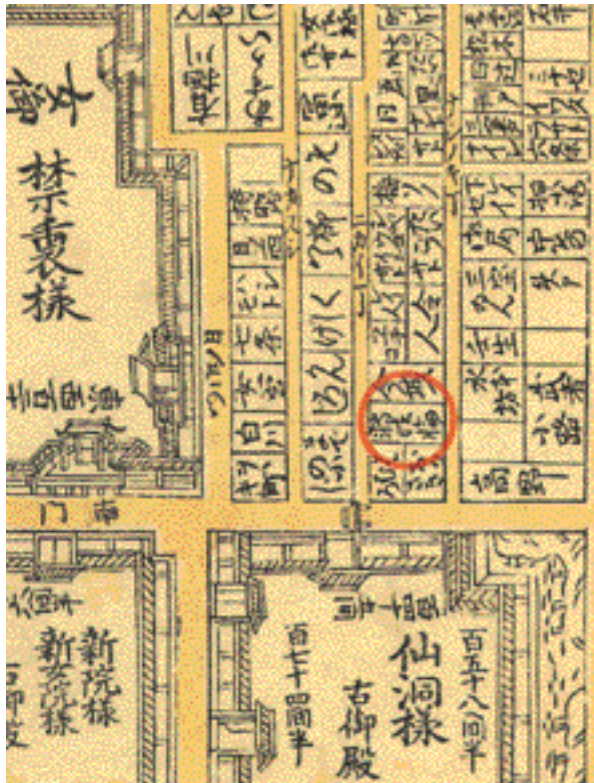
す。出土した家紋瓦は、公家屋敷の屋根を飾っていたものと思われます。

さて、家紋は各家に固有のものです。したがって、家紋瓦の出土分布に注意すれば、その場所にかつて住んでいた公家を特定することができるはずですが、公家町の屋敷の配置は現存する古絵図からある程度わかりますが、検出した遺構を特定の公家屋敷に比定してゆくのは案外難しいものです。ここでは、家紋瓦の出土分布から判明した江戸時代後期の三条邸の事例を紹介してみましよう。

2001年に発掘したA区は幅約5

m、長さ約110mの南北に細長い調査区です。他の調査区と同様、ここからも公家屋敷の遺構が検出されましたが、調査区の幅の狭さが災いして、屋敷の境界すら判然としませんでした。ところが、この調査区から珍しい家紋の軒棧瓦が20数点出土しました。

棧瓦は丸瓦と平瓦が一体化した略式の瓦で、江戸時代の半ば頃から普及します。軒先部分に用いられた棧瓦を軒棧瓦といいますが、軒丸瓦や軒平瓦と同様、巴文や唐草文が施されるのが普通です。出土した軒棧瓦は平瓦部分は通常の唐草文ですが、丸瓦部分には巴文



増補再版 京大絵図（1741）に描かれた公家町
『京都古地図集成』柏書房より一部改編



公家町の屋敷割復元図（は結雁文瓦の出土地点）

ではなく鳥の文様が施されていました。そこで、この文様を調べてみると、「結雁」と呼ばれる家紋で、これを使用する公家は三条（転法輪）家であることがわかりました。三条家は摂家に次ぐ家格の高位の公家です。

古地図によれば、三条家の所在地は仙洞御所の北側東西街路から二階町通を北に上がった2軒目で、屋敷の東側は梨木町通に面しています。また南隣には葉室邸、北隣には今城邸が描かれています。

仙洞御所の場所は江戸時代後期から変わっていませんから、A区が三条邸の一部にかかっていることは、およそ見当がつかしました。しかし、南北に長い調査区は、複数の公家屋敷を横断していると思われる。

そこで、より明確に三条邸の範囲を知るために、結雁文瓦の分布

状況を調べてみました。

それによると、結雁文瓦は全てA区の北半部から出土しており、この範囲が三条邸の範囲であることが推測できました。また、分布域の北端部には東西方向の石列と溝が検出されていて、これが北の今城邸との境界にかかわる遺構であること、南のB区で検出された

東西道路との間の空間が葉室邸であることなどが、次々に判明したのです。

江戸時代には、家紋や商標など固有の「しるし」を有する器物がたくさん出現します。「しるし」の考古学は、これからも様々な可能性を見せてくれそうです。

（内田 好昭）



A区全景 手前の石列が三条邸の北側境界部分（北から）